

2019年5月6日（川端）

データ圧縮基礎資料

6 AEP 性 (漸近等分割性)

補題 1 (チェビシエフの不等式) 期待値 $\mu = EX$, 分散 $\sigma^2 = V(X) = E(X - \mu)^2$ をもつ確率変数 X について, チェビシエフの不等式:

$$P(|X - \mu| \geq k\sigma) \leq \frac{1}{k^2}$$

が成り立つ.

証明:

$$\begin{aligned} \text{左辺} &= E1\{|X - \mu| \geq k\sigma\} \\ &\leq E\frac{(X - \mu)^2}{k^2\sigma^2} \\ &= \frac{1}{k^2}. \end{aligned} \quad (1)$$

定理 1 無記憶情報源 $\{Y_l\}$ において, Y_1 の期待値, 分散が有限のとき, その平均値 $\frac{1}{n} \sum_{l=1}^n Y_l$ は期待値に確率収束する. 言い換えると, あらゆる $\varepsilon > 0$ において,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} P\left(\left|\frac{1}{n} \sum_{l=1}^n Y_l - EY_1\right| \geq \varepsilon\right) = 0$$

が成り立つ.

証明: チェビシエフの不等式を用い, $\varepsilon = k\sqrt{\frac{1}{n}V(Y)}$ とおくと,

$$P\left(\left|\frac{1}{n} \sum_{l=1}^n Y_l - EY_1\right| \geq \varepsilon\right) = \frac{V(Y)}{n\varepsilon^2} \quad (2)$$

が成り立つ. この右辺は $n \rightarrow \infty$ のとき零に収束する.

定理 2 \mathcal{X} 上の離散無記憶情報源 $\{X_l\}$ において, $H(X) < \infty$, $V(-\log p(X)) < \infty$ のとき, $-(1/n) \log p(X^n)$ は $H(X)$ に確率収束する.

注意 1 同じ条件下で, もっと強い収束:

$$P\left(\lim_{n \rightarrow \infty} -\frac{1}{n} \log p(X^n) = H(p())\right) = 1 \quad (3)$$

がいえる. 確率変数列のこの収束を概収束といい,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} -\frac{1}{n} \log p(X^n) = H(p()) \quad (a.s.)$$

のようにかく.

定義 1 確率分布 $p: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{R}$ により定義される, 無記憶情報源について, 集合:

$$\{x^n : \left| -\frac{1}{n} \log p(x^n) - H(p()) \right| \leq \varepsilon\}$$

をこの確率分布に関する ε -標準集合とよび, $A_\varepsilon^{(n)}$ とかくまたこれに属する系列 x^n を ε 標準系列という.

次の定理がなり立つ。

定理 3 (AEP 性) $p: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{R}$ に関する, $A_\varepsilon^{(n)}$ について以下が成り立つ。

1.

$$\begin{aligned} x^n \in A_\varepsilon^{(n)} &\leftrightarrow 2^{-n(H(X^n)+\varepsilon)} \leq p(x^n) \\ &\leq 2^{-n(H(X^n)-\varepsilon)} \end{aligned}$$

2. $\exists n_0(\varepsilon), \forall n \geq n_0(\varepsilon)$,

$$P\left(X^n \in A_\varepsilon^{(n)}\right) > 1 - \varepsilon$$

3.

$$\#A_\varepsilon^{(n)} \leq 2^{n(H(X)+\varepsilon)}$$

4. $\exists n_0(\varepsilon), \forall n \geq n_0(\varepsilon)$,

$$\#A_\varepsilon^{(n)} \geq (1 - \varepsilon)2^{n(H(X)-\varepsilon)}.$$

注意 2 AEP性は *Asymptotic Equipartition Property* の略である。 \mathcal{X}^n はほぼ確率 1 の標準集合と確率的に無視可能な部分に分かれるが、標準集合において、系列は「一様分布」している（あるいは「漸近的に等分割」している）。

証明：1 は標準系列の定義のいい替えである。2 は、定理??そのものである。3. は不等式

$$\begin{aligned} 1 &= \sum_{x^n \in \mathcal{X}^n} p(x^n) \\ &\geq \sum_{x^n \in A_\varepsilon^{(n)}} p(x^n) \\ &\geq \sum_{x^n \in A_\varepsilon^{(n)}} 2^{-n(H(X^n)+\varepsilon)} \quad (1.より) \\ &= \#A_\varepsilon^{(n)} 2^{-n(H(X^n)+\varepsilon)} \end{aligned}$$

からいえる。4. については、2 を成り立たせる $n \geq n_0(\varepsilon)$ について、

$$\begin{aligned} 1 &= \sum_{x^n \in \mathcal{X}^n} p(x^n) \\ &= \sum_{x^n \in A_\varepsilon^{(n)}} p(x^n) + \sum_{x^n \notin A_\varepsilon^{(n)}} p(x^n) \\ &\leq 2^{-n(H(X^n)-\varepsilon)} \left(\sum_{x^n \in A_\varepsilon^{(n)}} 1 \right) + P\left(X^n \notin A_\varepsilon^{(n)}\right) \\ &\quad (1.より) \\ &\leq 2^{-n(H(X^n)-\varepsilon)} \#A_\varepsilon^{(n)} + \varepsilon \quad (2.より) \end{aligned}$$

がなりたつが、この不等式を変形することにより得られる。さて、情報理論では多出力情報源や、ネットワーク型通信路の符号化の問題を考えることができるが、AEP性は複雑な問題の本質をえぐりだすのに有用である。例えば、AEP性を用いると情報源符号化の順定理が簡単に得られる。

定理 4 有限のアルファベットをもつ定常無記憶情報源 $\{X_l\}$ を考える。これに対して、情報源ブロックサイズ n の一意復号可能な可変長符号の列が存在し、 $n \rightarrow \infty$ においてその期待平均符号長は情報源のエントロピーに収束する。

証明： $x^n \in \mathcal{X}^n$ にたいして一意復号可能な符号 φ_n を以下のように定義する： $x^n \in A_\varepsilon^{(n)}$ のとき、フラグビット 1 に x^n の $A_\varepsilon^{(n)}$ における固定符号長 $\lceil \log \#A_\varepsilon^{(n)} \rceil$ の数え上げ符号を接続する。 $x^n \notin A_\varepsilon^{(n)}$ のとき、フラグビット 0 に x^n の \mathcal{X}^n における固定符号長 $\lceil \log \#\mathcal{X}^n \rceil$ の数え上げ符号を接続する。任意の $\varepsilon > 0$ にたいして、 $n_0(\varepsilon/2)$ を定理のようにとる。 $n \geq n_0(\varepsilon/2)$ にたいして、期待平均符号長は、

$$\begin{aligned} E\varphi(x^n) \text{ の長さ} &\leq P\left(X^n \in A_\varepsilon^{(n)}\right)(2 + \log \#A_\varepsilon^{(n)}) + \\ &\quad P\left(X^n \notin A_\varepsilon^{(n)}\right)(2 + \log \#\mathcal{X}^n) \\ &\leq 2 + \log \#A_\varepsilon^{(n)} + \varepsilon/2(2 + \log \#\mathcal{X}^n) \\ &\leq 2 + n(H(X) + \varepsilon/2) + \varepsilon/2(2 + n \log \#\mathcal{X}) \end{aligned}$$

のように上界できるが、両辺を n で割り、適当な $n_1(\varepsilon) \geq n_0(\varepsilon/2)$ をとるならば、 $n \geq n_1(\varepsilon)$ にたいして、右辺は $H(X) + \varepsilon$ で上界できる。一方一意復号可能な符号であるから、平均期待符号長は $H(X)$ で下界される。